
黄金の龍

鈴木へっず有人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金の龍

【Nコード】

N4426F

【作者名】

鈴木へつず有人

【あらすじ】

TMオマージュ小説企画、参加作品。インスピレーション楽曲：Dragon the festival<あらすじ>理が目覚めると、そこは見知らぬ土地であった。言葉が通じぬ少女、伝道師ビラコチヤとの出会い。そして理は見届けることになる、ある世界の崩壊の真実を…

第1話

理は痛みで目が覚めた。身体中が痛い。起き上がろうと試みるも、背中に激痛が走っただけだった。思わず呻き声が漏れる。その声が聞こえたのか、誰かが部屋の中へ入ってくる気配がした。

心配そうに理を覗き込んだのは褐色の肌をした美しい少女だった。目を覚ました理を見て、少女は嬉しそうに笑う。そして一生懸命に話し掛けてくるが、理にはその言葉が理解出来ない。何とか意思の疎通を図ろうと、身振り手振りを交えて語りかけてくれるが、日本語でも英語でもない少女の言葉の欠片すら理解することが出来なかった。理は困ったような笑顔を見せた。少女も同じような表情になる。二人で困っている、少女の背後から囁れた声が聞こえた。その声を聞いた少女は、救われたような顔をした。立ち上がり声の主を迎えに行く。

少女と共に現れたのは、見窄らしい格好をした老人であった。

理は何とか自力で起き上がった。横になったままでその老人を迎えることはとても失礼な気がしたのだ。

老人は持つて来た器を溜まって理に差し出す。中は得体の知れない緑色の液体で満たされていた。得も言われぬ匂いがする。思わず顔を顰めた。

「飲まれよ」

老人は言った。しかし、とてもその液体を飲む気にはなれない。首を左右に激しく振った。しかし老人は無理に器を理に手渡す。助けを求めるように、少女の顔を見たが、少女も飲めというようなジエスチャーを繰り返すだけだった。仕方なく、鼻を摘んで一気に飲み干す。この世のものとは思えないほど、苦かった。いつまでも苦さが喉の奥に残っているようで、思わず舌を出した。

すると今度は少女が甘い香りのする白い液体が入った器を差し出してきた。どうやら口直しに飲めという意味らしい。一口飲んでみ

る。どうやらミルクティに近い飲み物らしい。こちらは安心して飲める。理がそのミルクティを飲んで一息ついたところで、老人は少女に部屋を出て行くように指示した。少女は名残惜しそうにしながらも、老人に従い部屋を出て行く。

老人と理の二人きりになる。

老人は理を、まるで品定めでもするかのように上から下まで、舐めるように見る。しばらく、重苦しい空気が流れていた。

「あの…」

沈黙を破ったのは理からであった。

「質問してもよろしいでしょうか？」

老人は黙って頷く。

「ここは…何処なのでしょう。それに貴殿は…」

「ここは太陽の神殿。ここに住まうは、太陽神と選ばれし太陽の処女達だ」

「では、貴殿が太陽…」

「否。私は太陽神ではない」

それ以上の質問は出来なかった。何故自分が此処にいるのかが分らない。理が本当に訊きたいのは、ここは日本なのか外国なのか、自分が生きていた世界なのかパラレルワールドなのか、そういったことだ。それをどうという言葉で表現したならば、望む答えが返ってくるのか。悩んだ挙句の質問だった。他の言葉では質問しようがない。

二人に再び沈黙が訪れた。老人は優しい微笑を浮かべながら理を見ている。理は俯き、何をどのように言えば良いのかを思索する。

「あの…」

理は再び声を出した。

「あの…どうして僕は、貴殿の言葉が分るのでしょうか？ あの女の子が話す言葉は全く理解出来なかったのに」

老人は静かに言う。

「私が”伝える者”だから、だろうな」

「伝える者…？」

「さよう。我が名はビラコチャ。この世界に智慧を与えし者だ」

「ビラコチャ」

理はその名を繰り返した。どこかで聞き覚えがある名前だ。それが何処でだったのか、思い出そうとする。しかし思い出せない。思いつくそうと考えると、激しい頭痛が襲ってくる。思わず呻く。

「今は無理に考えないことだ。時がくれば、何もかも分る。お前さまに今必要なのは、傷を治す時間なのだ」

時間だけが全てを解決するかのようにビラコチャは言う。しかし、このままの状態では理自身が不安で押し潰されてしまうかも知れない。

「僕は、どうしてここにいますのしょう」
理はストレートに訊いた。

「お前さまは流されてきた。何処からかは私も知らぬ。しかしお前さまは太陽の処女達が沐浴に使う岸边に流れ着いていたのだ」

「ビラコチャ。貴殿でも分らぬことがあるのですか？」

「そうだ。私を全知全能の神だとも思ったか？」

ビラコチャは笑った。それは嘲笑などではなく、好々爺が若者の無知を楽しむような、そんな笑いであった。

部屋の外でビラコチャを呼ぶ声がした。その声の主は部屋の中に入ってきた。それは、ジャガーの毛皮を纏った男であった。

「あの男が目覚ましたそうで…」

ジャガーの毛皮を纏った男は理を見た。

「目を覚ましたのなら、この都を離れるがよい」

「まあ、そう急がせんでも良からう。この者の傷はまだ癒えてはおらぬ」

「しかし…」

「この者が敵か味方か。まだ分らぬでは無いか。それに傷ついた者を追い出すような真似を、神が許すだろうか」

「それはそうですが…」

男は再び理を見た。その目には憎悪に似た感情が浮かんでいる。この男にとって理は憎むべき相手のようだ。その理由は分らない。理は男を見た。一目で地位の高い者であることは分った。ただピラコチャの言葉には逆らうことは出来ないらしい。

「ピラコチャに気に入られたようだ、この地にいる太陽の処女達に不埒な真似をしてみる、その生命にて購って貰うからな」

男はそう言い捨てると部屋を出て行った。どうやら男が危惧しているのは、理が先ほどの少女と恋仲になることのようにだ。つまり、あの男も少女に恋心を抱いているのだろう。あの少女は理が意識を失っている間中、看病してしてくれたようだ。

「お前さまの心配をするより、自分の心配をしたほうがよさそうなの……」

ピラコチャは困ったような顔をした。

「ああやってジャガーの毛皮を纏い、自分は王にでもなったつもりのようにだが。あやつにその器は無い。それを自覚した時に、暴挙に出なければよいが……」

溜息混じりに言う。

「お前さまには関係のない話であつたな。さて、しばらくはこの地に滞在するとなれば、処女達の言葉が分らぬでは不便であろう。私が言葉を教えよう」

ピラコチャは笑顔で言い、理も頷いた。

ピラコチャから言葉を教わってから数日後には、理は一人で出歩けるまでに回復した。

初めて部屋を出て聴が目にした風景は、明らかに日本ではなかった。どこかで見たことがあるような気がするのだが、それがどこか思い出せない。

しかし都のある場所は特異だった。山の頂に石造りの都があつた。まるで下界から隔離するように建つ都なのだ。出会うのは女性ばかり。確かにピラコチャはここに住んでいるのは太陽の処女と呼ばれ

る者達と言っていた。処女というくらいだから、女性なのだろう。年齢は様々だが、美しい女性しかないのも特徴だろうか。

ギリシア神話にアマゾネスという女性しかない部族の話があるが、それとも違う。たまに勇ましい姿の女戦士を見かけるが、それはこの都の護衛をする者。基本的にここにいる女性は庇護される存在のようだ。

男はビラコチャとジャガーの毛皮を被った男、そして理の他に数人いる。しかし、ほぼ全員が去勢されていた。去勢されていないのはビラコチャと理、そしてあの男の三人だけだ。

これらのことを総合すると、この都は”都市”ではなく”神殿”であると推測される。だとすれば、太陽の処女とは”巫女”なのだろう。いや、修道女か。もしくは日本でいうところの斎宮だろう。神の妻として命を全うすることを定められた女性が、この地に集まっていると思われる。

「理」

声の主を振り返ると、目を覚ました時に傍にいてくれた少女だった。

「どうかしたの？　ぼうつとしているように見えたけど。まだ、どこか痛む？」

「大丈夫だよ、ジョアン」

ジョアンは少し恥ずかしそうに笑った。理の隣に座る。

「理の肌は白いね。ビラコチャよりは少し黒いけど」

理の腕と自分の腕を並べて見比べる。

確かに、ジョアン達太陽の処女や去勢されている男達に比べるとビラコチャやジャガーの毛皮を纏った男は肌の色が白い。理の肌もビラコチャ達に近い。しかしビラコチャは確実に白人の肌だ。顔立ちも彫りが深く、欧米人に近い。ジャガーの毛皮を纏った男も同様だ。理は違う。肌は比べれば白いが顔立ちとはジョアン達と似ている。彫りも決して深くない。

「ビラコチャは、どうしてここにいる？　あのジャガーの毛皮の男

も……」

「ビラコチャは伝道師よ。どこから来たのかは知らない。だけど、世界中のことを知っているし、彼から学ぶことは多いわ。あのジャガーの男……マンセルは、突然現れたの」

「突然？」

「そう。突然。理みたいに流れ着いたとかじゃなくて、まるで神様みたいに、ある日この地に現れて……」

ジョアンがマンセルの話をしようとした時、ちょうどマンセルがやって来た。ジョアンと並んで座っている理を見て、眉を顰める。

「ジョアン。この男に近づくな」

命令するように言う。ジョアンは肩を震わせ、助けを求めるように理に寄り添う。

「ただ話をしているだけじゃないか。なんでそんなに怒るんだ」

ジョアンを助けるつもりで、理は言う。

「お前には話し掛けていない」

マンセルは言う、ジョアンの腕を引っ張った。ジョアンが小さな悲鳴をあげる。

「やめろよ。嫌がつているじゃないか」

理がマンセルの腕を振り払う。

「俺に逆らうのか！」

「逆らうとかじゃなくて、ジョアンが嫌がつているからやめろと言っているだけじゃないか」

ジョアンを守りながら、理はマンセルと対峙した。その時、ビラコチャが現れた。

「この地で揉め事は厳禁ぞ？」

なんとものんびりとした風情で話し掛けてくる。

「ビラコチャ！ この男の傷は癒えた。もう出て行かせるべきではないか」

「何故？」

「この男は規律を乱す。太陽の処女と何かあってからでは遅過ぎる」

マンセルは必死の形相でビラコチャに訴えかける。その様子にビラコチャの眉がピクツと動いた。

「何故、理が太陽の処女と間違いを犯すと思うのだ？」

「こいつは部外者だ。この地の規律など知らない」

ビラコチャは理とマンセルと交互に見た。

「知らないのなら教えれば済むこと。第一、部外者と言うならば、私やマンセル、お前も部外者であろう」

「私や貴方は違う。部外者ではない。神に選ばれし者なのだから」
「神にねえ……」

ビラコチャはマンセルを見つめる。

「理がこの地に流れ着いたのも、神の御意志かも知れん。だとすれば、理も神に選ばれし者ではないか？」

ビラコチャの言葉にマンセルは黙った。

「用事を思い出した。これで失礼するが、ジョアン、お前は自分の立場をよく考えよ」

マンセルは言うど、背を向けて歩き出した。その背中にジョアンが舌を出す。

どうやらジョアンはマンセルが嫌いらしい。しかし、今までのマンセルの行動や言動を見る限り、マンセルはジョアンに好意を寄せているとは思えない。

「神に選ばれし者ねえ……」

ビラコチャは困ったように言った。前々からビラコチャの言葉の端には、マンセルに対する困惑が見えていた。

「神に選ばれた王、とても思っているのか……」

「神があんな奴を選ぶはずがないわ。マンセルこそ、この地を去れば良いのに。どうしていつまでもここに留まっているのかしら」

ジョアンは言うてから少し反省したように頭を叩いた。

ジョアンを呼ぶ声がした。別の太陽の処女が理達の後ろに立っていた。それは太陽の処女達の中では年長者であるヨンジャだった。
「あら。元気になったのね。良かった」

理を見るとヨンジャは笑った。歳はとっているが、ヨンジャも美しい女性だ。

「ジョアン。今日の当番は貴女でしょ？ 忘れずに時間になったら来るのよ」

「忘れてないわ、ヨンジャ」

ジョアンは答えると立ち上がった。

「準備をしなくちゃ。それじゃ、理。また後でね」

ジョアンが去ると、ビラコチャが隣に座る。

「理は、本当に傷が癒えたなら、この地を離れるのだろうな」

ビラコチャが言う。

「え？ ああ。そうですね。いつかは出て行くことになると思います。だけど、今は…」

「出て行くにしても、何処に帰れば良いのか分らないか」

理は頷いた。

マンセルに言われるまでもなく、自分が部外者であることは自覚している。しかし、自分が何処にいて、どうしてここに辿り着いたのかも分らない状態では、出て行きようがないのが、本音だ。このままこの都市を出て行っても、野垂れ死にしてしまうだろう。

「本当は、お前さまのような者に私の後について貰いたいのだが…」

「貴殿の後を？ 僕に伝道師になれと言うのですか？」

ビラコチャはすこし寂しそうに笑った。

「人間に永遠の生命など無い。いや、生きとし生けるもの全てに永遠などありはしない。その寿命に差があるだけだ」

「それは、確かに」

「寿命はどんなものにもある。世界とて、いつかは滅びるときが来る」

ビラコチャの真剣な眼差しに、理は吸い込まれるような気がした。

第2話

不意に、脳裏に過ぎる言葉があった。

「エル ドラド」

「なんだ？」

ビラコチャが訊き返す。

「エルドラド…。黄金の…」

思い出した言葉をそのまま口にする。ビラコチャが驚いたように理を見る。

「それをどこで…？」

「分りません。急に頭の中に浮かんできたんです。だけど、僕がここに来た理由は恐らく、そのエルドラドを探していたのではないかと思います」

「エルドラドとはムスイカの王ではないか。ムスイカの王を探して、この地に辿り着いたのか？」

「王様：ですか？ 違います。僕が探していたのは人ではないと思います」

「人ではない？」

「僕は、エルドラドとは人や都ではないと考えています。他のことはまだ、全く思いついていませんが、僕がエルドラドを探していたことは間違いないです」

「では、問おう。お前さまが考えるエルドラドとは、一体何である？」

「龍です」

理はキツパリと答えた。

「龍、であると？」

理の答えにビラコチャは更に驚いたように目を見開いた。

「間違っているのかも知れませんが、でも、誰一人として、エルドラドに辿り着いた者はいないのでから、エルドラドが都だとは思え

ないのです」

「だから、王であろう。ムスイカの。それも今となつては伝説になつてしまつた王だ。違ふのか？」

「分りません。ムスイカの王が金箔を身体中に貼り付け、数々の財宝と共にグアタビータ湖にそれらを沈める即位の儀式のことは知っています。グアタビータ湖自体をエルドラドと解釈する人もいました。だけど、王は何故自分の身体に金箔を張り付ける必要があるのですか？ 金と財宝をそのままグアタビータ湖に沈めてもいいはずなんです」

理の言葉に力が漲ってくる。エルドラドについて語る度に、理の頭の中で様々な知識が甦ってくる。

「わざわざ金箔にして、自身を黄金に染めるのには、意味があるはずです。そしてその意味は、僕は神に近づくためなのだと解釈しているのです」

「神に、ねえ……。では、神は黄金の姿をしているということか。しかし、黄金は何者にも替えがたい宝ではないか。だからこそ、ムスイカの王は自分をその黄金に染めるのではないのか？」

ビラコチャは言い返す。確かに、ビラコチャが言いたいことは分る。王とは何者にも替えがたいものだ。黄金の存在と同じであるという解釈も可能だ。しかし、理はその解釈を一度捨てている。

「モデルがあるはずなんです。自分を黄金に染めるといふ儀式は、王が何かと同一であるという証であるはずなんです」

「ほう。それで、そのモデルの神というのが……」

「はい。そして、その神こそが黄金の龍だと思つのです」

理が言つと、ビラコチャは考え込むように眉を顰めた。その表情が理を不安にさせる。エルドラドを求める者がこの地にいるのは、禁忌なのかも知れない。そう思つた。

ビラコチャは首を振つた。

「そうか。そういうことであつたか……」

「ビラコチャ？」

理は呼びかけた。

「いや。何でもなし。お前さまがこの地に現れた理由が、垣間見えたような気がしたただけだ。それよりも、少し疲れたのではあるまいか？ 顔色が優れぬ。色々と思い出すのには労力があるからの。部屋に帰って休むがよろう」

ビラコチャはそう言うのと、理に背を向けた。その背中が急に小さく見えたような気がして、理は不安になった。ビラコチャは後継者を探している。その時期に自分がこの地に現れたことに、何か意味を見出したようだ。

後継者が見つかるということは引退の時期が近づいていることを意味する。ビラコチャが本当に後継者を見つけたとき、その生命の炎が燃え尽きるのかも知れない。

理は与えられた部屋に戻った。寝床に横になり、天井を見つめる。エルドラド。本来はエル・オンブレ・ドラードといい、意味は黄金を塗った人だ。つまり、ビラコチャが言うように、ムスイカの王の即位の儀式の際の姿を指すと思われる。しかし、なぜ王は全身に黄金を塗るのかということは分っていない。儀式なのだから、疑問を抱くこと自体が不自然なのかも知れないが、理はこの疑問を置き去りに考えることは出来なかった。だからこそ、何かモデルがいるのだと思ったのだ。

「ジャガー…なのか？」

理は呟いた。メソアメリカと呼ばれる地域ではジャガーは神聖な動物だ。人間が世界を支配する以前はジャガーが支配していたと考えられている。人間はジャガーから智慧を盗み出したと伝える神話もある。ジャガーの体毛を黄金と見なし、王は神聖なる動物であるジャガーと同一であることを示唆するために黄金に身体を染めると考えることも出来るはずだ。

「いや。そんなはずはない」

ジャガーと同一であると示したいのであれば、マンセルのようにジャガーの毛皮を身に纏えば済むこと。かつては世界を支配してい

たジャガーを殺し、その毛皮を手に入れることが出来るという、力の証にもなるはずだ。

しかし実際は違う。王が身に纏うのは黄金なのだ。ジャガーではない。

「きゃっ」

ジョアンは恐ろしい顔で天井を見つめる理を見て、小さな悲鳴をあげた。まるで何かにとり憑かれたような顔だった。ジョアンが来ていることにも気付かずに、理は口の中でまるで呪文を唱えるように、何かをブツブツと喋っている。

ジョアンは理が横になっている寝床に腰掛けた。人の気配で、理は正気に戻る。そしてジョアンがそこに居ることに気がついた。

「ジョアン。どうしたの？」

「それは私の台詞。理ったら、私が来たことにも気付かないで、一人でなにか呟いているし…。ちよつと怖かったわ」

ジョアンは拗ねたように言う。

「ごめん。思い出していたんだ。僕はどうしてここに来たのか…」「思い出したの？」

「いや。どうしてここに来たのかは全く。ただ、エルドラドを探していたってことと、その関連でここに来たのは間違いないと思う」

「そう…。色々、思い出してきているの。それは回復している証拠なんだろうね」

ジョアンは寂しそうに笑った。理はいつかなくなる。それは最初から分っていることだった。ここは神殿。本来であれば男が立ち入ることすら憚れる場所だ。その地に理がいるのは、彼が傷ついた人だからだ。傷が癒えれば立ち去るしかない。マンセルが言っていることも間違いではないのだ。

「何か用があつたんじゃないのかい」

理に言われて、ジョアンは慌てて笑顔を作った。

「食事の用意が出来たから呼びに来たの」

「ああ。今、行くよ」

理は寢床から起き上がった。

不意に誰かに呼ばれたような気がして、理は振り返った。しかし、そこには笑顔のジョアンしかない。

「呼んだかい？」

「今？ 呼んでないよ？」

ジョアンは首を傾げた。

「何も聞こえなかったし」

「そうだよ。気のせいかな」

理は言って、部屋を後にした。

シンプルな夕食が済んだ頃、ビラコチャが現れた。ビラコチャは理を呼ぶと、立ち入りを禁止されている神殿の深部へと入っていく。そこは太陽の処女が儀式を行っている場所だ。その儀式がどんなものなのか、理は知らない。最深部へ通じる扉が開かれる。そこには、神像があった。

「これが、なんだか分かるか？ 理よ」

ビラコチャが言う。理は言葉が出なかった。目の前にある神像は間違いなく龍の姿をしている。それも西洋のドラゴンではなく、蛇のような姿をした龍だ。

「龍 ですよ、ビラコチャ。これは、龍ですよ？ どうしてここに龍の像があるのですか？ 僕はてっきりこの神殿に祭られているのはジャガーなのかと思っていました」

神殿を取り囲む細工の中に、龍を象ったものはひとつも無い。マンセルもジャガーの毛皮を纏って自分の力を誇示している。それ故、この地の神はジャガーであると、理は思い込んでいた。しかし、実際に神殿に安置されていたのは龍だったのだ。

「お前さまが考えている通り、ムスイカの王が模しているのは、この黄金の龍だ」

ビラコチャは意を決したように言った。

「そして私は、この龍に選ばれて智慧を与える者となった」

「龍に 選ばれて？」

「そうだ。理よ。神とは簡単に人間に、いや、自分が統治する世界にその姿を現さないものだ。しかし、滅する時期ではないのに誤った方向に世界が動き出したとき、それを正さなければならぬ」
「その正しい方向に導く者として、ビラコチャ、貴殿が選ばれたという事です」

理が言う、ビラコチャは頷いた。

「今までも、何度も神は私の前に現れた。そして私が伝道すべき道を示された。今も混乱が起きようとしていると私は感じている。故に神に神託を受けるべく、この地に來たのだ。しかし、神は現れない」

「それは…」

「滅びの時が迫っているのだろう」

ビラコチャは静かに言った。

「そんな…」

「如何なるものにも永遠などない。それは世界とて同じこと」
龍の神像の前で跪き、深く頭を垂れる。

「そして己が治める世界が滅ぶとき。それはその神が滅ぶときでもあるのだ」

「神が…滅ぶ…？」

理は繰り返した。ビラコチャは頷く。

「神が滅ぶなんて…」

「全てのものに寿命がある。私のこの言葉はそのまま神の言葉だ」
理を振り返り、ビラコチャは言った。そして立ち上がり、理を促すように歩き出した。理は黙ってその後ろを歩く。

第3話

二人が揃って神殿から出てくると、そこにマンセルが仁王立ちで待っていた。

「これはどういうことだ、ビラコチャ」

マンセルの目が怒りに燃えていた。

恐らくは、マンセルもこの神殿に入ることは許されていないのだろう。この神殿に入ることが出来るのは、太陽の処女とビラコチャだけなのだ。

誘われるままに聖域に足を踏み入れてしまったことを、理は後悔した。マンセルは自分を王になる男だと思っている。その彼ですら入ることを許されない場所に理が通されたとなれば、当然憤怒することには目に見えていた。配慮が足りなかった。ビラコチャに誘われたとしても、遠慮をするべきだったのだ。

マンセルは怒りを露わに理を睨み付ける。その表情はまるで、悪魔にとり憑かれた者のようであった。

「私を侮辱して、ただで済むと思うな」

マンセルは言い捨てると、闇の中へと消えていった。

理はビラコチャを見た。このままではマンセルが何か重大な罪を犯してしまうような気がする。それを止めることが出来るのはビラコチャだけだ。マンセルはビラコチャには一目置いている。彼の言葉ならば従うだろう。何か起きてしまう前に、行動を起こさなければならぬ。

「ビラコチャ。マンセルを追いかけなくては…」

しかし、ビラコチャは動こうとはしなかった。ただ静かに目を閉じている。

「滅び…」

ビラコチャは小さく言った。

「この世界に滅びの時が近づいているのだ。マンセルを追いかけて

何になるう。その時が来るのをほんの一時、遅らせるだけだ」

「そんな…」

理は絶句した。割り切ることなど出来ない。ビラコチャが言う通り、この世界に終わりが近づいているとしても、それを何もせずに見過ごすことなど出来るはずがない。何かをしなければ。

理は駆け出していた。マンセルを追いかける。追いかけて何が出るかなどは、分らない。しかし、身体が勝手に動いていた。

闇の中から悲鳴が聞こえた。悪い予感が走る。悲鳴が聞こえたのは、太陽の処女達が寢床としている館であった。館から逃げてきたヨンジャとあった。ヨンジャは理を見ると、助けを求めてきた。

「ジョアンが！」

ヨンジャは理にしがみついた。

「ジョアンがマンセルに捕まったわ！」

「捕まった？」

ヨンジャは頷いた。

「突然館に入ってきて、何か喚いていたの。それからジョアンを無理やり館から連れ出して…」

最悪の事態が起ころうとしている。太陽の処女は絶対不可侵の存在だ。誰であろうと、それこそ王であろうと、その血を汚してはならない。その掟をマンセルは破ろうとしているのだ。それは一族抹殺を意味する行為だ。しかしマンセルは理と同じように、別の場所から突如として現れた人間。一族など存在しない。だとすると、マンセルがこの地に留まることを許したビラコチャと、それを黙認したこの神殿に暮らす全ての者を一族と見なす可能性もある。そうなれば、ここにいる太陽の処女も含めて、全てが抹殺されてしまう。それは避けなければ。

「マンセルは何処に向かった？」

「分らない。ジョアンを引き摺るように館を飛び出していったから……」

理は館へと再び走り出した。

「お願い、理。ジョアンを助けて。ジョアンの血を汚されないように……」

理の背中に、ヨンジャは祈った。

マンセルはジョアンを連れて、神殿に向かっていった。太陽の処女とビラコチャ以外が神殿の深部に立ち入ることがないように、その前には屈強な女戦士が待ち受けている。理が中に入れたのは、ビラコチャが連れていたからだ。

ビラコチャに選ばれた男が、理であったことにマンセルは激怒したのだ。今まで、マンセルこそが神に選ばれし者であると噂されてきた。自分が何処からこの地へやってきたか、マンセルも分らない。気がついた時には、ここにいたのだ。その存在自体が神秘とされ、ビラコチャに選ばれるのであれば、去勢されたこの都にいる男や麓の王ではなく、マンセルであると。そのために、マンセル自身も努力をしてきた。ビラコチャに教えを乞い、次代の伝道師になるべく、自分なりに知識を深めてきた。その自信がジャガーの毛皮には込められていたのだ。

しかしビラコチャが選んだのは、傷つき流れ着いてきた理だった。何の努力もなく、その自覚もないような男が選ばれた。自暴自棄になっていた。

全てのことを学んだマンセルであればこそ、自分がしようとしていることが起こす事態と結果を予測出来ないはずがない。その知識を得ているからこそ、マンセルは禁忌を犯そうとしているのだ。

自分を蔑ろにしたビラコチャを、自分を蔑んできたジョアンを、そして自分を選ばなかった全てのものを破壊する。そうすることで、マンセルは新しい神になろうとしているのだ。

「痛い！ やめて！ 離して！」

ジョアンが叫ぶ。

「ウルサイ！」

マンセルは脅す。

「光栄に思うがいい。お前は、新しい世界を作るための生贄になる

のだ！」

どうしようもない絶望感がジョアンを支配していた。どんなに抗ったところで、所詮女の力だ。マンセルに敵うはずがない。まして、今のマンセルは正気のまままで狂気に走っているのだ。誰が、この暴走を止められるというのか。恐らくはビラコチャですら、この凶行を止めることなど出来ないだろう。

神殿の入り口には、すでに多くの女戦士が待ち構えていた。武器を持ったその勇ましい姿にも、マンセルは動じることはない。自らの剣を抜き、その刃をジョアンに突きつける。

「これを見る！」

女戦士達の動きが止まる。

「お前達が抵抗すれば、ジョアンをこの場で殺してやる」

「バカなことは止めるんだ、マンセル」

女戦士の一人が言う。

「ジョアンは太陽の処女だ。何人たりともその身を傷つけることは許されぬ」

「はっ！ それがどうした。それはお前達が崇める神が決めたことだろう！ 俺の知ったことではない！」

マンセルは言う、女戦士を振り払う。そして神殿へと押し入った。

神殿の深部入り口にはビラコチャがいた。マンセルがここへ来ることはビラコチャには分っていた。理は無我夢中で声がする方に走り出してしまったが、ビラコチャはここへ戻ってきていたのだ。

「ビラコチャ！」

マンセルはビラコチャを見ると怒鳴った。

「全てはお前のせいだ。お前がああ理を選んだことが全ての間違いの始まりなんだ。今、この場でそれを撤回するならば……」

「撤回？ 何をだ？」

ビラコチャは全く慌てた様子もなく言う。

「お前の後を継ぎ、この世界の神となるのはこの俺だと宣言しろ！」

「それは出来ん」

ビラコチャは真っ直ぐにマンセルを見ていた。その目はいつになく深い暗い色をしている。それは何かを覚悟しているように見えた。

「マンセル。お前は破壊者だ。だが、創造者ではない」

「なんだと！」

ビラコチャは続けた。

「神は自ら前の世界を破壊する。神は破壊者でもある。しかし、神は創造するのだ。新たな世界を」

「だから！ 俺がこの世界を壊し、ジョアンを生贄に新たな世界を創造してやろうと言うのだ」

「お前にその器はない！」

声を荒げることなど無かったビラコチャが一喝した。突然のことに、マンセルの動きが止まった。

「己のことしか考えられないようなお前に、新世界の神となる資格などないのだ」

「あの理ならあるというのか？」

「私は、次の世界の神を選ぶ立場になどない。私は、ただの伝道師だからな」

「ならばこの場に神を呼び出せ。そしてその神を血祭りに上げてやる。そうすれば、誰も俺に逆らうことなど出来ない！」

「馬鹿なことを…」

ビラコチャは溜息をついた。

「お前はそこまで愚かであったか…」

「愚かかどうかは、歴史が決めること。俺は神をも超越した存在になつてやるんだ」

マンセルはジョアンを突き放した。そしてジョアンに向けて剣を振り下ろす。

その時、ビラコチャがジョアンを庇うように間に入った。ビラコチャの背中に、マンセルの剣が突き刺さった。

「ビラコチャ！」

「大丈夫か、ジョアン」

ビラコチャは苦しそうに言った。

「私は大丈夫。それより、喋らないで。体力を奪ってしまうわ」

「良いのだ。これが私の運命。私がこの地で死ぬことは決まっていたのだ」

「そんな…」

ジョアンが何か言いかけた時、ビラコチャを突き刺していた剣が抜かれる。それは出血を促す行為だ。傷から鮮血が溢れ出る。その血がジョアンの身体に降り注がれる。

「老いぼれの血では、新しい世界など創れるはずがない。ジョアン。お前こそが次の世界を作る鍵なのだ」

マンセルの声は落ち着きを取り戻していた。しかし、狂気の中にいることに変わりはないかった。

「お前は俺に犯されながら、朽ちるのだ。そして新しい世界の母なる大地となる」

「馬鹿なことを…」

ビラコチャがマンセルを睨む。

「お前では…神に…など…なれぬ…」

ビラコチャの身体から力が抜けた。そして、床に倒れ込んだ。

「いやあ！」

ジョアンが叫んだ。

その声を理は聞いた。神殿へと急ぐ。神殿の前には多くの太陽の処女と戦士達が集まっていた。理を見つけるとヨンジャが駆け寄ってきた。

「二人は中に！ ビラコチャもいるそうよ」

「神殿の中に？」

理は女戦士を見る。今が非常事態であることは誰の目にも明らかだが、それは人間の世界での話だ。神の意思に逆らって聖域に踏み入ることは許されぬ行為。しかし女戦士は黙って頷いた。それは理にこの聖域に入ることを許可することだった。そして自分の腰に携

えている剣を抜き、理に手渡す。

「これを…」

抜き身の剣は静かな、しかし鋭い光を宿していた。

「この剣は…」

理は驚いた。戦士達が剣を携えていたのは知っていたが、どれ無理の目からみれば鈍らだった。実践で使えるとは思えないような代物ばかりだ。しかし、差し出された剣は明らかに殺傷能力を持っている。

「これはビラコチャより授かった剣だ」

女戦士は言った。

「ビラコチャより、数日前に預かった。近日中に何かしら良くないことが起きるであろうから、その時にはこれを使えと…」

理は女戦士よりその剣を受け取ると、神殿の中へと入っていった。ジョアンの悲痛な叫びが聞こえてから、神殿の中は静まり返っていた。まるで中で起きている惨劇を悟られまいとするかのようにである。しかし悲劇はこの中で起こっているのだ。理は真っ直ぐに神殿の最深部を目指す。

ジョアンの身体はすでにマンセルに汚されていた。永遠の処女であることを義務付けられた太陽の処女である。その血が汚されることは己の死を意味することを、ジョアンは知っている。例えば誰かと激しい恋に落ち、自らの役目も捨て、命さえも惜しくはないと思つて迎える時であったなら、死の瞬間までジョアンは幸福にいられただろう。しかし、今は違う。己の意思とは無関係に、狂人の妄想の犠牲になってしまったのだ。この先など望めないジョアンは、抵抗する気力すら失っていた。虚ろな目が激しく腰を振るマンセルの姿を、力なく映している。

「ジョアン！」

最深部の扉が開かれ理が現れた瞬間に、ジョアンの瞳に生氣が戻る。

「いやぁ！」

ジョアンは再び悲鳴を上げた。マンセルはその声に反応し、薄気味の悪い笑みを浮かべた。

二人の横には、既に息絶えたビラコチャの骸が転がっている。

「マンセル！ お前：」

理は剣を構えた。

「ジョアンを離せ！」

「もう、遅いわ！」

マンセルはジョアンから離れ、ビラコチャの身体に突き刺さったままだった剣を抜き取る。それは理が持っている剣に良く似ていた。「ほう。お前、その剣を何処で手に入れた？」

マンセルは理が持っている剣に興味を示した。

「この時代、この世界では造れぬ代物ではないか」

「これは、ビラコチャが遺してくれたものだ」

「ビラコチャが：。やはりそうか。ビラコチャも俺と同じ、アトランティスの生き残りであつたか」

「ア：アトランティスだと？」

かつて地球上に存在したといわれる超古代文明。一夜に沈んでしまった失われた大陸の名が、マンセルから出てきたことに理は驚いた。

「アトランティスは実在したというのか！」

「ほう。お前はアトランティスを知っているのか。ならば、あの国がどれほどの栄華を誇っていたかも知っているだろう」

理はマンセルを見た。確かに、ビラコチャにしてもマンセルにしても、この辺りにいるどんな種族にも似ていない容姿をしていた。どちらかといえば欧米人に近い。しかしまさかアトランティスの生き残りだとは思わなかった。いや、マンセルからその名を聞くまで理の中にアトランティスという概念がなかった。

「ま さか。信じられない：」

理が絶句するのを、マンセルは満足そうに見ていた。

「アトランティスの生き残りである俺こそが、次の世界の神に相応

しい」

マンセルの声で理は我に返った。もう一度剣を構え直す。

「ジョアンから離れる！」

突然理の態度が変わって、マンセルは驚いたように目を見張った。「アトランティスの生き残りだかなんだか知らないが、それがどうした。次の世界の神となるだと！ 寝言は寝て言え」

「ほう……。神に逆らうというのか？」

マンセルは再び気味の悪い笑顔を浮かべる。まるで血に飢えた悪魔のような顔であった。

「創世には生贄が必要だ。お前のような奴でも、神にその命を奉げられることを感謝するんだな！」

マンセルが理に向かってくる。その隙に、ジョアンが逃げる。黄金の龍の後ろへジョアンが避難したことを目の端で確認し、理はマンセルへ向かって突進した。

マンセルの剣が理を襲う。それを避けようとして、理は躓き倒れ込んでしまった。すぐに立ち上がろうとしたが、すでにマンセルが目の前で高々と剣を振り上げていた。

「理！」

ジョアンが叫んだ。その声とほぼ同時にマンセルは剣を振り下ろした。

その時だった。神殿が大きく揺れた。そして何者かの声が部屋中に響き渡った。それは唸り声であった。まるで獣のような、それでいてどこか畏怖すべきような声である。理は黄金の龍を見た。龍が、黄金の龍の瞳が赤く光っていた。そして唸り声を上げていたのも、龍の神像だった。

「ひっ！」

ジョアンが短い悲鳴をあげ、龍の神像から離れる。

マンセルは歓喜の表情を浮かべる。

「神が甦るぞ。この俺を次の神に指名するべく、神が甦ろうとしている。さあ、理。お前の命で神を完全に甦らせようぞ」

剣が理を目掛けて降りてくる。もう駄目だと覚悟をした。

《愚か者めが》

それはピラコチャの声であった。しかし、ピラコチャは床に倒れたままだ。息もしていない。

神像がガタガタと音を立てて動き出す。そして、黄金に光り輝く龍が出現した。龍は光る目でマンセルを見る。

《我が名はエル・オンブレ・ドラード。この世界を創造せし者》

「エル ド ラド…」

理は黄金に光り輝く龍から目が離せなかった。自分の目の前に現れたこの龍こそが、探し求めていたものであることを確信する。

「エル・オンブレ・ドラードよ」

マンセルが黄金の龍の前に出る。

「お前の血でこそ、新しい世界は創造出来るというもの。さあ、俺が創る新たなる世界の礎になれ！」

《愚か者めが！》

黄金の龍がマンセルを睨みつける。

《我が滅ぶる時は世界が滅びる時。お前も我の世界の一部。共に滅びるが運命》

「この世界が滅びれば、新たなる世界が創造される。その世界において、神となるべく生まれたのは、この俺だ。何者にも邪魔などさせぬ」

マンセルは黄金の龍目掛けて突進していく。剣が、龍の鱗を剥ぎ取る。黄金の龍の身体から、赤い血が流れた。剥ぎ取られた鱗の一枚が、理の手の中に落ちてきた。

「エルドラド！」

理はマンセルと黄金の龍の間に割って入った。探し求めてきたものが壊されようとしているのを、黙ってみている訳にはいかない。

「止めるんだ、マンセル」

「邪魔をするな！ お前が、お前をピラコチャが選んだことが、この崩壊の始まりではないか！」

「それは…」

《違う》

黄金の龍は理を見た。それはマンセルに向けられるような激しい視線ではなかった。

《お前を選んだのは、この私。私がお前をこの地に呼び寄せたのだ》

「僕を この地に…？ ビラコチャが言っていたように、彼の後を継ぐ者として…？」

《違う》

「では、何故？」

黄金の龍の瞳が細くなる。微笑んでいるようだった。

《信実を知る者が必要だ》

「信実を 知る？」

《そうだ。この地が滅び、我が世界が滅んだ本当の理由を知る者がいなければならぬ》

「貴方の世界が滅ぶ、本当の理由…」

《全てのものに寿命がある》

黄金の龍は言うと目を閉じた。

《私にも、滅びの時が来る》

「そして、新たな世界が始まりが来る」

突然、マンセルが言うと黄金の龍の身体に剣が突き刺さった。龍は悲鳴をあげる。その声は凄まじいものだった。声の振動で神殿自体が大きく揺れている。

「ジョアン。逃げるんだ。そして外にいる人たちにも避難するように伝えてくれ！」

「でも、理は…」

「僕のことは良い。早く！」

ジョアンは頷くと出口へと駆け出す。それをマンセルが追おうとする。しかし、ジョアンが出て行った直後に、黄金の龍が出口を塞ぐように立ちはだかった。

《愚かなマンセルよ。よく聞くがいい。アトランティスが何故、一

夜にして海底へ沈んだのか》

黄金の龍はマンセルを見た。その瞳には先ほどまでの鋭さはなかった。慈愛に満ちた瞳であった。

《世界を滅ぼす最大の原因は” 驕り ” だ》

「 驕り … 」

理は繰り返す。

《アトランティスの人々は自らの文明に酔いしれ、驕り昂ぶった。世界を手中に治めたと勘違いし、そして自滅したのだ》

「 自滅 ? 」

《そう。あれは自滅だ。神を崇めることを止め、自らが神であるかのように振舞った結果が、あの惨事だ。マンセルは同じ過ちをこの地でも犯した》

理はマンセルを見た。マンセルは怒りの表情を露わにしている。そして黄金の龍に向かって叫ぶ。

「 俺は、過ちなど犯してはおらん ! アトランティスが滅んだのは、俺のせいではない 」

《マンセルよ。聞くがいい。お前達アトランティスの者は制裁されたのだ》

「 制裁されただと ! 誰にだ 」

《嘗てはお前とその祖先が崇めていた、そしてその王の血筋の源になったポセイドンに、 だ 》

マンセルは驚いたように黄金の龍を見た。黄金の龍が言うように、アトランティスの王はポセイダンの血筋であると、文献には記されている。

《人はいつの世も愚かな生き物よ。自分達が生かされていることを忘れる》

「 生かされている … 」

《そうだ、生かされているのだ。他者の命を喰らい、自らの命を存える。それゆえ、全てのものに感謝を忘れてはならないのだ》

黄金の龍はまるで幼子に諭すかのように、穏やかで優しい声で言

った。

《お前達も感謝を忘れずにいれば、今もあの大陸で優雅に暮らしていたであろうに…》

「感謝だと？ 何に感謝をするのだ。己の命を存えるものは、自らの力で手に入れてきたというのに、誰に感謝をしろと言うのだ。神にか？ 結局何もしてくれない、あの都を滅ぼしたような神に感謝をしろと言うのか！」

黄金の龍は、静かに目を閉じた。

《理よ。このマンセルの姿を見よ》

理は言われるがままにマンセルをもう一度見た。自ら新世界の神であることを宣言したマンセル。血走った目でこちらを睨んでいる。その姿はとても神とは形容しがたい。やはり悪魔にとり憑かれた者にしか見えない。

《アトランティスの王は、己の血に酔った。ポセイドンの血を継し高貴な血筋なれど、ポセイドンではないことを忘れてしまった》

「忘れるとどうなると言うのだ！」

マンセルが叫ぶ。

《その結果は、自分が良く知っているであろう、マンセルよ》

マンセルは黙った。アトランティスの生き残り、マンセルは言った。つまりアトランティスはもう、この世界にはないのだ。

不意に、理の身体を光が包み始めた。

《理よ。もう一度言おう。いつの世も、驕りが世界を破滅に導くのだ》

「エルドラド！」

理は叫んだ。

《この世界が滅んだ理由…、お前の脳裏に刻み込むがよい。そして自分の生きる時代で、それをよく考えるのだ》

神殿が崩壊していく。マンセルはそれでも、エルドラドに向けて刃を剥いた。

「エルドラド！」

もう一度理は叫んだ。崩壊する神殿の瓦礫にマンセルと黄金の龍エルドラドの姿が消えていく。そして、理は気を失った。

「目を開けたぞ！」

それは聞き覚えのある声だった。目覚めたのは、白い部屋であった。目の前には懐かしい顔が並んでいる。

「理！」

その顔は口々に理の名を呼ぶ。辺りを見回す。そこはとうやら病院の一室であった。

「ここは……」

「病院だよ。お前は、意識不明のままで発見されて、今まで三ヶ月も植物状態だったんだぞ」

白衣を着た人物が目の端に映った。

「ビラコチャ！」

それはあの神殿でマンセルに命を奪われたビラコチャにそっくりだった。しかし、ビラコチャのように薄汚れた姿はしていない。

「私は、そのような名前ではありませんよ」

白衣の人物はそう言った。しかし、あまりにもビラコチャにそっくりだ。その人物が理に近づくと、周りの人が少し離れた。どうやらこの人物は医者らしい。理の耳元に顔を寄せ、医者は言った。

「お帰りなさい、理」

理は医者を見た。医者は意味ありげに微笑み、そして部屋を出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4426f/>

黄金の龍

2010年10月8日15時47分発行